ふしぎなともだち

♣

ジャック・クロンビ

白阪実世子・作　さべあ のま・絵

ふしぎなともだち♣ジャック・クローバ

白阪実世子
作
さべあ のま
絵

講談社

わくわくライブラリー

ふしぎなともだち　ジャック・クローバー

1989年7月20日　初版第1刷発行

定価1100円(本体1068円)
著　者　白阪実世子
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21(郵便番号112)
電話　東京03(945)1111(大代表)
N.D.C.913　238p　22cm
印刷所　豊国印刷株式会社
半七印刷株式会社
製本所　島田製本株式会社

©Miyoko Sirasaka 1989　Printed in Japan
落丁本・乱丁本は，小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえします。なお，この本についての
お問い合わせは，児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-195628-0　(児一)

ふしぎなともだち
ジャック・クローバー

白阪実世子・作
さべあ のま・絵

もくじ

1 男のちかいと商店街のシール――4

2 なぞの黒ずくめの男――15

3 パンケーキをつくりながら話す「コスモス」の秘話――29

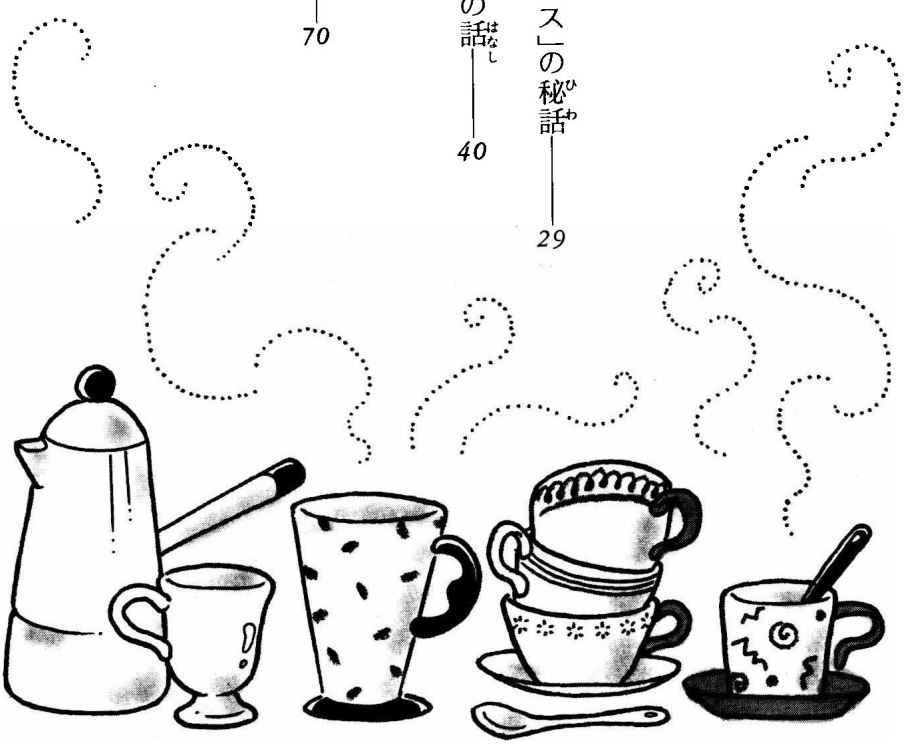
4 パンケーキを食べながらきく第一空間の話――40

5 「コスモス」は大はんじょう――57

6 ハートだらけのバレンタインデー――70

7 取材の日はみんなでおしゃれ――82

8 ジャックの一大決心――93



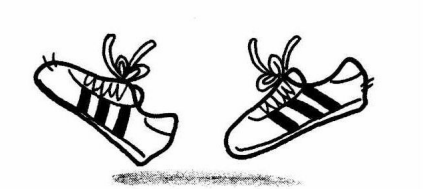
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

9 第一空間の大事件——106
10 タルファンの花——122
11 放課後の牛乳びん作戦——135
12 じっけん室で——147
13 わさびの証明——160
14 一に特訓、二に特訓——178
15 聖戦——192
16 ふれふれぼうずと父さんからの電話——215
17 空港へ——231

装丁・さし絵——さべあ のま

1

男のちかいと商店街のシール



はあ、はあ……。くるしい……。ああ、のどがかわいた。でも、もうすこしで公園通りに出るから、のぼり坂もあとちょっとだ。がんばらなくちゃ……。これは男のちかいだからね。ぜったいにがんばるぞ。ぜったいに……。はあ、はあ、はあ……。

毎日ジョギングをすること——これが今年の元旦にたてた男のちかいだ。ぼくは毎日こうして走って、ちかいを実行している。といってもきょうは一月五日だから、まだ五日めだけれど……。なぜぼくが、こんなちかいをたてたのかというと、男らしくなりたいからなんだ。そう、男らしくなること——はじめは、これをちかいにしようかと思った。でも、これじゃじっさい、なにをどうやっていいのかわからない。そこで、とりあえず男らしくてたくましいからだになるように、ジョギングをすることにした。ジョギングなら一人でもできるし、走ることはすべてのスポーツの基本だからね。

ああ、やっと坂がおわった。ここからは、しばらく公園にそって走りやすい道がつづく……。はあ、はあ……。男らしいってみんなにいわれるようになるまでは、どんなことがあってもがんばるぞ。もう、女の子みたいだなんていわせない。

そうなんだ。まわりの人は、ぼくのことを女の子みたいだっていう。ぼくは、それがいやでいやでたまらない。ぼくは女みたいにすぐ泣いたりしないし、女の子とばかり遊んでいるわけじゃない。それなのに、なぜそんなふうにいわれるのかというと、

まず、名前がいけない。

杉原らも——ひらがなで「らも」と書く。この名前をはじめてきいた人は、たいがい、

「らも⁉　へえ、めずらしい名前だね。どんな字を書くんだい？」

とか、

「おもしろい名前だこと。『らも』なんていう名前は、はじめてきいたよ。」

とおどろく。

小学校の入学式の日、はじめてじぶんのクラスへいき、担任の先生から一人ずつ名前をよばれた。そのとき、ぼくの名前をよんだあとで、先生はこういったんだ。

「先生ね、あなたの『らも』っていう名前を見たとき、女の子かなって思ったのよ。」
すると、クラスのみんなは、いっせいにぼくのほうを見たんだ。あのときは、ほんとうにはずかしかった。はじめて小学校へいった日に、クラスじゅうのみんなから、わらいものにされてしまったような気がした。その日、ぼくはうちに帰ってくると、買ってもらったばかりのピカピカのランドセルをほうりなげ、
「『らも』なんていう名前、いやだ。ほかの名前にする！」
といって大さわぎをした。そして、夕ごはんのとき、母さんが父さんにその話をすると、父さんはこまった顔でぼくを見ていた。
「らも」というのは父さんがつけた名前で、なんでも、父さんがそんけいするイギリス人の植物学者、ジェームズ＝ラモ博士からとった、いや、いただいた名前だという。
ラモ博士はとっくのむかしに死んでしまっているけれども、たくさんの本を書いた人で、いまでも博士の本は世界じゅうで読まれているらしい。ラモ博士の書いた本は、もちろん植物についての話が多いけど、花や木のことばかりでなく、人々や動物のくらしとか、地球の空気のこととか、いろいろなおもしろい話が書いてあるって、父さんはいっていた。わかいときにラモ博士の本を読んでかんげきして、じぶんも博士みたいな植物学

者になりたいと思ったという父さんは、ほんとうにそのとおりになり、大学で植物学をおしえている。いまは高山植物の研究の仕事で、去年のクリスマスのつぎの日からヨーロッパにいっていて、四月にならないと日本に帰ってこない。

父さんのへやにある、ガラスのとびらのついた本だなには、父さんがたいせつにしているラモ博士の本がいくつもならんでいる。そのなかでめだつのは、一巻から五巻までそろっている五さつのぶあつい本だ。それは外国の本で、茶色のかたい表紙に金色の文字で、『地球の植物』という意味の題名が英語で書いてある。まえにその本を見せてもらったことはあるけど、こまかい英語の字がびっしりならんでいるだけなので、なにが書いてあるのかぜんぜんわからなかった。そのとき、父さんはいった。

「らも、おまえが大きくなったら、この本だなにならんでいる本を読ませてあげよう。きっとかんげきするぞ。父さんがむかし、そうだったようにな。」

ほんとうに、ぼくもかんげきするだろうか……。

なんだか、さっきよりすこしらくになってきたみたいだ。よし、ここらへんでスピードアップしてみるか……。いち、に、いち、に、いち、に、いち、に……。あれ、エリカの

花だ……。公園のこんなところにエリカがあるなんて、知らなかった。たしか、北海道のおじさんの家にいったとき、この花、たくさん見たなあ……。

二番めの理由――ぼくが女の子みたいだといわれる二番めの理由は、花の名前をよく知っているからなんだ。

父さんは植物学の先生で、おまけに母さんは花屋のむすめときている。ぼくが二さいになり、ことばをしゃべるようになると、父さんと母さんは、庭にさいている花や、さんぽのときに見かけた花の名前を、どんどんぼくにおしえたらしい。それに、ぼくは小さいころから植物図鑑を絵本がわりに見てきた。だから、いつのまにか花や木については、くわしくなっていた。

カントウタンポポとセイヨウタンポポの見わけかただとか、野菜のレタスはキク科の植物であるとか、ユリには、オニユリとかヤマユリとかスカシユリっていう種類があることとか……。

そういうことをいうと、友だちは、

「おまえ、男のくせに、花の名前なんかよくわかるなあ。らものすきなのは、お花とお人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

形遊びかい？」

といって、ぼくのことをからかう。なかよしの健太なんか、

「おれは、花なんてチューリップとアサガオぐらいしかわからねえな。男はそれでじゅうぶんよ。」

なんて、いばっている。そのことを父さんに話したら、父さんは、

「あははは、花の名前だってなんだって、知らないよりは知ってるほうがいいんだぞ。」

と、しんけんに考えちゃくれない。

そして、三番めの理由――。

去年の大みそかのまえの日、ぼくは母さんといっしょに年末の買いだしにつれていかれた。駅前の商店街で、ぼくたちは、どっさり買いものをしてから、さいごに、けしょうひん屋にいった。母さんが口紅をえらびながら、けしょうひん屋のおばさんとおしゃべりをしてるあいだ、入り口の近くでまっていると、おばさんがこっちを見ていった。

「あら、杉原さんとこのぼっちゃん？　まあ、色が白くて、それにまあ、まつ毛も長くてかわいいわ。女の子だったらよかったのにねえ。」

そう、これが三番めの理由だ。

母さんはわらっていたけど、ぼくは心の中で、もうれつにおこっていたんだ。
かわいいだって？　かわいいなんて、小学校四年生の男にたいするほめことばじゃないぞ。それに、女だったらよかったなんて、ぼくは一度だって思ったことはない。
店を出てから、ぼくは母さんにやつあたりした。
「なんでこんなに荷物がいっぱいあるのに、けしょうひん屋なんかによったんだよ。口紅なんか、ほかの日に買えばいいじゃないか。」
母さんは、ぼくがなぜそんなにイライラしているのかわからないという顔をしながら、
「だって、きょうはシールが三倍もらえる日なのよ。」
というだけだった。
駅前の商店街で買いものをすると、百円ごとにシールが一まいもらえる。そのシールをためて台紙に五十まいはってお店に持っていくと、台紙一まいで百円ぶんの買いものができる。母さんは、このシール集めに必死で、十のつく日にたくさんの買いものをする。というのは、十日、二十日、三十日には、いつもの三倍のシールがもらえるからだ。
ぼくは、やっぱり女に生まれなくてよかったと思う。

……なんだか気分が悪い……。ゆっくり走ろう、家まであともうすこしだもの……。あともうすこし……。

とにかく、そういうわけで、ぼくは女の子みたいだといわれることがよくある。しかし、「らも」という名前を変えるわけにはいかないし、花の名前だっておぼえてしまったものはしかたがない。知らないふりぐらいはできるかもしれないけどね。そして、色が白いとか、まつ毛が長いなんていうことは、ぼくにはどうにもできないことなんだ。

ぼくは考えた。

いっしょうけんめい考えた。

そして、ついにひらめいたんだ。「らも」という名前でも、花にくわしくても、色が白くても、男らしいっていわれるようになる方法を。

それは、買いだしにいった十二月三十日の夜のことだった。

ぼくはタごはんがおわったあと、こたつに入ってピーナッツをつまみながら、テレビで「今年のスポーツハイライト」という番組を見ていた。その番組では、野球、すもう、サッカー、テニス、マラソンなどのいろいろなスポーツでかつやくした選手をうつしてい

た。画面が高校野球の試合をうつしているとき、アナウンサーがこういった。

「こうして、いっしょうけんめいにがんばる選手のすがたを見ていると、男らしい、若者のすがすがしさを感じますね。ヒットを打って思いきり走るランナー、ボールを必死に追う選手、光るあせ、うれしなみだにくやしなみだ。こういうひたむきな男らしさが、高校野球の人気の理由の一つでしょう。」

ぼくははじめ、ぼんやりその番組を見ていただけだったけど、このことばをきいたしゅんかん、これだ！　と思った。

スポーツ選手のなかには、もちろん女の人だってたくさんいる。でも、やっぱり、男がいっしょうけんめいスポーツをやっているすがたって、男らしくてカッコイイ。

ぼくの住んでいる北池町には、北池キッカーズという少年サッカーのチームがある。北池キッカーズは日曜日に公園のグラウンドで練習をやるので、日曜日のお昼ごろになると、緑と白のユニフォームを着た男の子たちがぼくの家のまえを通る。たまに試合にいくときなど、そのユニフォームを着たまま、おそろいのスポーツバッグを持って駅に集まったりしている。ぼくはそういうのを見て、まえから、ちょっといいなと思っていたんだ。

ぼくは考えた。たしか、新メンバーのぼしゅうは新学期にあわせて、毎年四月におこな

われるはずだ。一月一日からジョギングをして足をきたえておいて、四月になったらチームに入って練習をがんばってやって、そして試合に出てかつやくするんだ。そうなれば、きっとぼくのことを女の子みたいだなんてだれもいわなくなる。きっと……。

そう決心しながらテレビを見ていたぼくのそばで、母さんは買いものでもらったシールを台紙にはっていた。母さんが、なぜあんなシール集めにむちゅうになるのか、ぼくにはわからない。でも母さんは母さんで、あのときぼくが、心の中で男のちかいをたてていたなんて、これっぽっちも気づいちゃいなかっただろう。

あの晩ぼくは考えごとをしながら、ついついピーナッツを食べすぎて、おなかをこわしてしまったっけ。

はあ、はあ……。がんばらなくては……。がんばるんだ……。でも、だ、だめだ、ふらふらする……。頭がぼんやりしてきた……。あそこのかどをまがれば、もうすこしなのに……。ああ、くるしい……。

そこでぼくは意識がなくなって、たおれてしまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com